Osaka University Knowledge Archive

Title	京伝と馬琴　〈稗史もの〉読本様式の形成
Author(s)	大髙, 洋司
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57861
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【58】

氏　　名	大高洋司（おおたかようじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４０７０　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	京伝と馬琴〈稗史もの〉読本様式の形成
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　飯倉　洋一 （副査） 教　授　荒木　　浩　　准教授　加藤　洋介 京都大学名誉教授　濱田　啓介

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、江戸時代寛政期後半から文化３・４年頃にかけての時期、〈稗史もの〉読本様式が、その中心作者である山東京伝・曲亭馬琴の試行錯誤を通して、いかに形成されたかを緻密に跡付けたものである。とくに、〈稗史もの〉読本成立期において京伝と馬琴は競合し、馬琴が勝利したという通説に対して、京伝・馬琴はむしろ「兄弟作者」と呼ぶのがふさわしいという新説を提示し、あわせて〈稗史もの〉読本の長編構成の核として〈読本的枠組〉があることを指摘している点が大きな特徴である。

本論文は従来の研究史とその問題点および本論文の概要を示した序章と、第Ⅰ章「〈稗史もの〉読本様式の形成」、「第Ⅱ章　京伝と馬琴」から成る。400字詰原稿用紙換算で約590枚である。

序章では、横山邦治『読本の研究』の「〈稗史もの〉読本」のタームを継承しつつも、「〈稗史もの〉読本」は、〈読本的枠組〉すなわち、「人間・動物・モノ・言葉等、様々なかたちで作中に置かれ」「物語の発端近くで存在を提示され、以後それと明示されなくても、場面ごとの展開の背後に強く存在が看取され、結末は例外なく、言葉の謎が解かれるなり怨霊が解脱するなりして、作品世界の中からそれらの存在が消えた時に訪れる」という展開によって領導されているものであるという独自の見解を提示しながら、京伝・馬琴の対立から馬琴の勝利へという流れで理解されていた〈稗史もの〉読本の形成過程を、両者は兄弟作者として情報を交換しつつ読本様式を模索したと捉えなお

す構想を示した。

第Ⅰ章では、〈稗史もの〉読本様式の形成を史的に検討する。まず〈稗史もの〉読本の先駆けとして江戸初期読本を取り上げ、典拠の丸ごとの利用に長編化への試行錯誤を看取し、寛政改革の意向の取り入れに勧善懲悪への志向を読みとる。また従来後期読本の濫觴とされる『忠臣水滸伝』が長編構成においては『水滸伝』と『仮名手本忠臣蔵』によりかかるものであり、〈稗史もの〉読本としては過渡的な作品であると結論づけている。京伝の〈稗史もの〉第２作の『安積沼』が、『通俗孝粛伝』や『根無草後編』を丸取りしながら、それらの文体を和文化した「訳文」の成果を公開する趣向を有していたことを指摘、これにより〈稗史もの〉の基盤になる文体を確立したとする。また京伝の〈稗史もの〉第３作の『優曇華物語』が、高僧の予言という〈読本的枠組〉を用いて作品を安定させたとした。京伝は前作までにあった戯作性・知識性を『優曇華物語』では排し、なだらかな文体と、『通俗孝粛伝』から借りた四句偈を「読本的枠組」に用い、観音霊験譚という伝統的枠組で覆ったとした。馬琴の『月氷奇縁』は見事に〈読本的枠組〉を備えており、それは馬琴が『優曇華物語』を稿本段階で参照しているからで、同時期に成立した馬琴の中本型読本『小説比翼文』『曲亭伝奇花叙児』ではそれが達成されていないとした。

第Ⅱ章では、『優曇華物語』以後の京伝・馬琴の作品を詳細に検討し、馬琴の『月氷奇縁』『稚枝鳩』が京伝の『優曇華物語』を踏まえる一方で、京伝の『曙草紙』が馬琴の『石言遺響』を利用した形跡がみられること、馬琴の『四天王剿盗異録』と京伝『善知安方忠義伝』がともに『前太平記』を主要典拠としてこれを謡曲で覆う構想を持っていたことなどから、京伝・馬琴は兄弟作者として情報を交換しながら読本を制作していたとした。また文化３・４年の京伝・馬琴は女性の嫉妬を〈稗史もの〉読本に具現化しようとしたことにおいて共通しており、その最大の収穫が京伝『曙草紙』であったこと、それが馬琴読本の数作に影響を与えていることを論じている。

しかし京伝は『昔話稲妻表紙』においては、〈読本的枠組〉を〈演劇的枠組〉で覆う試みをし、〈稗史もの〉読本を推進する方向を転換して〈中本もの〉に引き下げようとし、ここから京伝と馬琴は異なる路線を歩むことになるとした。これは京伝・馬琴の勧善懲悪観の違いと関わっている。すなわち京伝は文化３・４年の読本において、善悪一如的に人間を描く試みを始め、馬琴は善悪を明確に書き分ける傾向を強め、善悪一如観を持つ京伝への違和感を伴ってその勧懲論を言表するに至る、と展望している。

論文審査の結果の要旨

本論文は読本研究史上不朽の著作である中村幸彦『近世小説史の研究』、横山邦治『読本の研究』を継承し、これを発展させた本格的な読本史研究であり、今後の読本研究が必ず参照しなければならない重要な業績になるだろう。

本論文の研究史的意義は、第一に、横山によって「京伝・馬琴の読本を頂点とする怪奇で複雑な伝奇的構想を有し、そのうえ勧善懲悪・因果応報の理念に支えられた純然たる仮作物語」と定義された、読本の中心に位置する「〈稗史もの〉読本」について、その中核に〈読本的枠組〉があるという指摘を行ったことである。申請者の造語である〈読本的枠組〉の語は現在既に広く学界で流通し、その影響力が大きいことを証している。また、〈読本的枠組〉から〈稗史もの〉読本をとらえる時、後期読本の濫觴として評価される『忠臣水滸伝』はむしろ〈稗史もの〉読本成立過渡期の作品だとし、従来さほど顧みられているとはいえない『優曇華物語』を高く評価したことは、文学史の記述に大きな修正を迫ることになった。

第二に、〈稗史もの〉読本の流れを、京伝と馬琴の競合と解説していた従来の通説を批判し、京伝と馬琴はむしろ兄弟作者の関係にあったとし、馬琴が『月氷奇縁』を作る際に、京伝の『優曇華物語』をその稿本段階で参照していたことなどを明らかにしたことである。これらの指摘は説得力をもち、新説としてインパクトが大きい。一方で、京伝と馬琴の勧善懲悪観の違いを明らかにし、特に京伝作品にみえる〈善悪一如〉という考え方は〈演劇的枠組〉の利用と関わることを指摘した点も特筆される。

本論文は、このような大きな提言を、作品の周到な読み込みと、京伝・馬琴両作品の徹底的な比較という、根気を要する緻密な作業を通して行っており、その結果、従来の馬琴中心の読本史を、京伝中心のそれに書き換えるという試みに成功している。これは今後無視しえない読本史の構想となるだろう。

しかし一方で読本以外への言及が少なく、また読本においても京伝・馬琴の作品にほぼ限られていて、狭い範囲の中での閉鎖的な議論という印象をまぬかれ得ない。〈読本的枠組〉についても京伝・馬琴以外の作者の作品に及ぼせるかどうかの検討は今後の課題として残されている。また 20 年以上に渉る考察をまとめているため、初出論文に大幅な加筆訂正を施しているとはいえ、全体としての統一感がやや欠如しており、論が行きつ戻りつしていると感じるところがなくもない。

とはいえ、本論文が数々の重要な提言をし、個々の論は既に大きな影響を与えていることから明らかなように、読本研究史上、必読の業績となることは疑いない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。